

41年間を振り返って

企画情報班 中尾節郎

1. はじめに

昭和42年3月、工業高校電気科を晴れて卒業したが、就職先がなかった。実は、生まれてから心臓に不整脈音があり、過激な運動をしないようにとの医師からの診断（ポタロー開存支管）を受けていた。そして高校3年生となり就職活動するが、面接後の健康診断を受けると不整脈で必ず不採用となる。このままでは就職ができそうもなく父母と相談し、思い切って心臓の手術をすることにした。当時、手術で恐れていたのは輸血感染による血清肝炎であったので、安全を考えて同級生から血を分けてもらうことにした。しかし、ど



写真1 筆者近影

うしてか血清肝炎になってしまった。結果として高校3年生の2,3学期を病気休学した。出席日数が足らず、担任の先生も卒業できるかどうか心配して下さったが、お前は優秀だ？との学校評価？で卒業試験を受け、なんとかみんなと一緒に卒業することができた。そして5月に病院を退院し、自宅で療養していたところ、少し仕事に出てみないかという誘いがあり、7月10日鳥取県庁土木部建築課に臨時職員として働きに行くことにした。仕事になじみかけた8月、元担任教師から、京都大学から採用募集があるがどうするか、と話があり面接を受けることにした。面接会場は鳥取大学で2代目鳥取観測所長岸本北方先生から面接を受けた。その場で正式採用が決まり、すぐにも勤務して欲しいとのことで、8月31日県庁を退職し9月1日から京都大学防災研究所附属鳥取観測所技術員として働くことになった。



写真2 鳥取観測所（旧本館、右端が4代目助手佃先生、2番目が筆者、左端が現技術支援職員矢部征さん）

以下に、著者（写真1）の41年間を振り返って、鳥取観測所あるいは地域との関わりについて思い起こしながら述べてみる。

2. 著者の略歴

昭和42年3月31日：鳥取県立鳥取工業高等学校電気科卒業

昭和42年7月10日：鳥取県土木部建築課勤務臨時職員

昭和42年8月31日：同退職

昭和42年9月1日：技術員（京都大学防災研究所附属鳥取微小地震観測所）勤務

昭和43年4月1日：防災研究所地殻変動部門に配置換

昭和45年4月1日：防災研究所附属鳥取微小地震観測所に配置換

平成2年6月8日：防災研究所附属地震予知研究センターに配置換・鳥取観測所

平成8年5月11日：防災研究所技術室に配置換となり観測班主任に任命

平成13年4月1日：技術室配置換による宇治勤務

平成 14 年 4 月 1 日：技術室企画情報班企画運営掛長に昇任

平成 19 年 4 月 1 日：技術室企画情報班長に昇任

平成 21 年 3 月 31 日：定年退職

同年 4 月 1 日：再雇用、鳥取観測所勤務予定

3．鳥取観測所および観測概要について

3-1．観測所の沿革

昭和 42 年、当時観測所（昭和 39 年創立）は鳥取市円護寺公園墓地内の裏手少し小高いところに建っていた（写真 2）。現在までに観測所勤務された助手の方は 6 名（写真 3）で、観測所長は 5 名の方々である。写真 4 は、初代助手を務められた元京大総長尾池和夫初代先生との記念撮影である。その後公園墓地内の道路脇に土地を購入し、今までの建物を本館、新しい建物を分館（写真 5）として 2 つの観測所での業務がスタートした。そして、創立 30 周年を機に、地震観測所をもっと地域にアピールして行こうと言うことで、観測所の壁に分かり易い看板を掲げることにし、「地震といえば鯰」を参考にして写真 5 の様な看板を掲げ、地域に慕われる観測所をアピールした。

しかしながら、円護寺地内の田畑、山は新しい団地造成にかかり、分館敷地を含んだ道路予定地となることが決まり移転保障の話が舞い込んだ。折衝の結果北園 1 丁目桜広場の一角が補償先として決まり土地交換され、新たな観測所が建てられ、そこを基点とする業務が新たにスタートした（写真 6）。

さらに、旧本館は地主さんが変わっていろいろな事情が重なったことから廃棄する事になり、平成 19 年撤去工事が行われ、更地にして地主へ返却することになり、由緒ある最初の建物は無くなってしまった。

3-2．著者が体験した主な地震

1983 年、鳥取県中部の地震

1984 年、山崎断層帯暮坂峠断層の地震

1985 年、鳥取県大山山麓の地震

1989 年、1990 年、1997 年、鳥取県西部の群発地震

1991 年、島根県東部の地震

1995 年、兵庫県南部地震

2000 年、鳥取県西部地震

2001 年、兵庫県北部の地震

2002 年、鳥取県中西部の地震

ここでは兵庫県南部地震についてエピソードも含めて記述する。

1995 年 1 月 17 日未明に発生した兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）は神戸市を中心と



写真 3 観測所歴代助手



写真 4 元京大総長尾池和夫初代助手と筆者



写真 5 鳥取観測所新館

する西日本を直撃し、死者 5500 人以上、約 20 万棟の建物が被害にあった。

この日は、早朝から地震にたたき起こされ、パジャマ姿で観測所へ出向いた記憶が残っている。すぐさま、地震がどこで起こったのかを調べるため、日常業務の 14ch ペンレコーダ記録をデジタイザーで読み取り震源決定を行った。1 時間もしないうちに新聞記者から情報を教えて欲しいとの電話が頻繁に入り、これまで何回かの地震発生直後に経験した慌ただしい日々の始まりであった。

余談ではあるが、そんな慌ただしい日々の中、若い夫婦が観測所を訪ねてこられたことがある。話を聞くと、神戸から避難をして鳥取に来られたとのこと。詳しく聞くと、鳥取市内に入った時何箇所かに「鳥取観測所」を案内する道路標識（写真 7）が目につき、思い切って訪ねる気になられたとか。実は、数年前から国道、県道、市道に「鯨の絵入鳥取観測所」の道路案内標識を建てて

いただくよう陳情をしていた。しかし快諾は得られず、検討しますとの回答で、ここ 1 年ほどはすっかり忘れていた。今回、神戸から若夫婦が避難し訪ねてこられたことで、陳情していたことを思い出した。ありがたいことに、兵庫県南部地震発生前頃に願いが叶い、しかも 3 者（国 2 箇所、県 2 箇所、市 3 箇所）が同時期に建てて下さったようで、早速県外からの来訪者の方に道路案内標識が役立ったのである。多忙の中ではあったが、念願が叶ったことを知りとても嬉しかった。

このように鳥取観測所の歴史は積み重ねられ、10 周年、20 周年、30 周年の時を経過し、2003 年 11 月に鳥取観測所創立 40 周年記念事業が挙行され、関係者はもちろん地域の多くの方々から祝福された（写真 8）。

3-3. 観測システムの変革の概要

・インク書きドラム方式（毎日の記録紙交換を現地委託）

当初はモノサシで読み取り手計算あるいは大型計算機で震源決定を行った。

1964 年に微小地震観測点として三日月、氷上、大屋、船岡が設置された。翌年以降、泉、倉吉、鹿野、鳥取観測点などが随時設置された。途中、1971 年に船岡観測点が智頭観測点に移設された。

・テレメータシステム（14ch ペン書き、MT 記録方式）

1976 年 4 月からはデジタイザーで読み取りミニコンピュータで震源決定および解析処理を行うようになった。

さらに、多里観測点、久米観測点が増設され、10 観測点による NTT 専用回線による地震観



写真 6 現在の鳥取観測所



写真 7 道路案内標識（国道）



京都大学防災研究所 鳥取観測所創立 40 周年記念祝賀会 2003.11.8 記 鳥取シテ・キタム

写真 8 鳥取観測所創立 40 周年記念事業

測網が中国地方東部～近畿地方北西部に展開された。

- ・テレメータシステムのインテリジェント化

1991年から大屋、多里、久米観測点テレメータをインテリジェント化し、その後残る観測点もインテリジェント化テレメータに置き換えられた。さらに鳥取から宇治への伝送は衛星テレメータ装置になった。

- ・SATARN システム

2000年以降、鳥取系の震源処理においては SATARN システムが導入され、気象庁データ他と統合された地震波形データを UNIX マシン上で win システムによって読み取り、高密度高精度による震源決定解析処理を行うようになった。

現在は、智頭、倉吉が廃止され、残りの 8 地震観測点を維持管理している。そしてデータ伝送は、衛星装置及び NTT 専用回線は廃止され、NTT フレッツ回線に移行された。



写真 9 動物による断線

3-4. 観測点の保守点検

観測点の保守点検で多い現象は、地震計ケーブルが動物によって食いちぎられ欠測となることだ。写真 9 に三日月観測点での動物の歯による通信線断線状況を示す。経験を積むと波形記録を見てある程度の原因と場所が把握でき、対応することができるようになる。数多くのトラブルに対し、波形記録がどのようになっていたかをメモし記憶することで対処することができることが多い。後輩と一緒に出張するときには作業メモを残すように指導してきましたが、上述を踏まえて将来に役立ってくれることを期待したからである。

また積雪時に保守点検することもあった。鹿野観測室周辺の積雪状況を写真 10 に示す。積雪時、地震計ケーブルを架空で通しているときの修理は大変である。まず、積雪時の歩き方は雪を固め、その固めた雪の上を一步一步、時間をかけて歩くのがコツである。時々深みにはまるときがあるので注意がいる。故に積雪時の地震計ケーブルの修理は、距離が長ければ長いほど苦労が加算される（写真 10、雪上歩行にチャレンジしている西村和浩君である）。



写真 10 積雪時の鹿野観測点

4. 個人研究

4-1. ガンマー線連続観測

2 代目助手であった見野先生の影響もあり、地震予知の手法の一つであるガンマー線量の連続観測を行った時期があった。最初は、1943 年鳥取地震で地表面に出現した吉岡・鹿野断層周辺に測定地点を決め、毎月同じ場所測定を行い、ガンマー線量の変化を調べた。また鳥取観測所坑内においても連続観測を行った。名古屋大学の三河地殻変動観測坑内におけるラドン濃度とガンマー線量とを比較し両者が対応していることを見出した。このことは NHK 鳥取放送にも取り上げられ、放送された。

4 - 2 . 地震活動に伴う b 値の時間変化

中規模地震発生前後の地震活動の変化を数値化できないだろうかと言うことで、鳥取観測所におけるテレメータ以後の精度良い震源決定データを用いて、地震の規模別頻度を示す「b 値」に目を付け解析を行った。その結果、地震活動の活発な地域において中規模地震発生前後に「b 値」が変化することが分かった。しかしながら、その後の中規模地震発生では同様な結果が得られず、残念ながらこの研究は検証されず進んでいない（写真 11）。

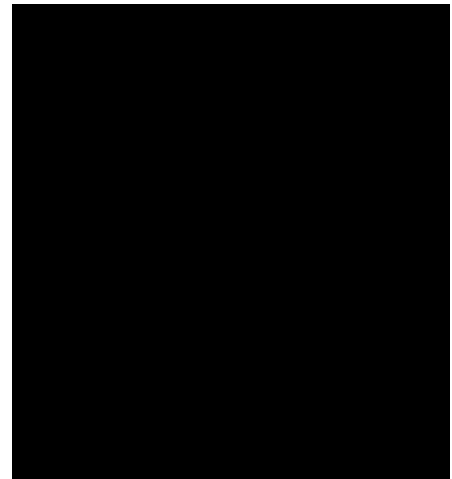


写真 11 新聞掲載

5 . 新聞記事

鳥取観測所から市民に発信される地震・防災、観測所に関する新聞などの記事で、著者が関わった主なものは下記の通りで、写真 12 にその一例を示す。

1. 中規模地震発生に伴う記事、2 編
2. 臨時観測に伴う記事、6 編
3. 地震データ解析結果に伴う記事、7 編
4. パソコンによる地震情報提供する記事、2 編
5. 観測所見学の記事、1 編
6. その他、地震防災に関する記事、9 編

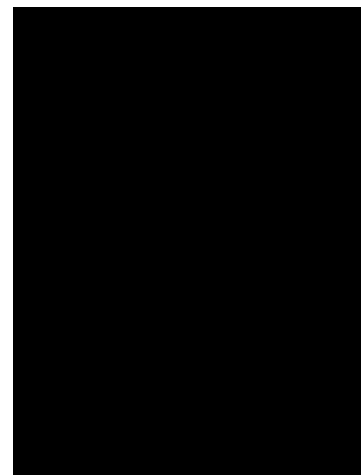


写真 12 日本海新聞掲載

6 . 地域貢献

6 - 1 . 山陰の地震（日本海新聞月連載）

鳥取観測所として県民のみなさまに、平素からもっと地震のことを知ってもらい、防災意識を高めていただこうということで、地元新聞社である日本海新聞社と相談し毎月地震情報を掲載することになった。1995 年 1 月、「山陰の地震」という見出しで 3 代目鳥取観測所長住友先生から始まった。鳥取観測所長交代によって渡辺先生が「続山陰の地震」として受け継がれ、その後、渋谷先生（現鳥取観測所長）・伊藤先生・大志万先生が輪番に記事を投稿された。しかしながら、足掛け 12 年間続いた本連載は、新聞社の意向に従い、一部の人々には惜しまれながら 2006 年 8 月中止となった。

6 - 2 . 職場体験学習

平成 12 年に始まった中学生の職場体験学習ネットワーク中ノ郷は今年で 9 回目となった。鳥取市教育委員会では鳥取市内の中学 2 年生を対象とし、「生きる力」を育成するために、地域に学ぶ「ワクワクとっとり」事業の一環として実施している。鳥取観測所では毎年、地元の中学 2 年生数名を受け入れている。事業所とは異なるため、地震の学習や実験・実習などの体験してもらっている。この事業に協力し、感謝状をいただいたので紹介する（写真 13）。また、この体験活動につ



写真 13 職場体験学習

いてはウェブ上（技術室通信、技術室報告）でも紹介されているが、地震学会でも口頭発表し全国の地震関係者の方々に報告した。

6-3. 地域の人材バンク制度

地元小学校には「人材バンク制度」があり、子供たちの健全育成面で、子供たちと地域との結び付きを取り戻したいと、いろいろな分野で秀でた知識や技術をもつ地区内の住民の方々が登録された。その中の一人として登録され、「地震のお話」をした。また、臨時地震観測点でお世話になっている小学校でも講演依頼があり、「地震のお話」をすることもあった（写真14）。

7. 観測業務の思い出

何も知らない私を学会出席や研究の世界へ導いてくださったのは4代目助手の佃為成先生であった（写真2）。最初に共著論文となったのは「鳥取地方の最近の地震活動について」で、論文中のセクションを与えられ、自分で解析処理した結果を載せた。また、

「地震記録にはゴミとそうでないものがあり、一見ゴミと思われるものにも目を凝らして見るとそうでないものが見えてくるときがあり、それが宝物なんだよ」と教えてくださった。

また、毎日なんでもいいからメモ日誌を残すこと、忘れないように書くということ、後日に役立つことにつながるからと教えてくださったのは、尾池先生であり、業務を行う上で心がけてきたし、教訓として常に考えてきたことである。

また、臨時観測（地震、電磁気、水温、GPS）、プロジェクト研究および海外など多岐に渡って支援依頼をいただいた。その時出会った先生方との一番の思い出を思い起こすと次のようになる。

7-1. 地震、臨時観測

昭和42年当時は、3代目助手であった西田良平先生と地震観測業務を行っていた。高速道路はあまりなく、観測点保守には地道である国道を走っていた。当時、観測点までの所要時間は3時間から5時間位かかった。観測点の保守は朝、6時頃起床し作業を終了して帰るのは22時、23時が普通であった。そして、運転できるのは自分ひとりであったので、今考えれば、若いから体力があり頑張れたのだと思う。

現地勤務はなかったのが写真3には写っていないが、鳥取観測所の助手でもあった西上欽也先生とは、1983年の鳥取県中部の地震でお手伝いしたが、観測期間中、観測点の地主さんからマツタケを沢山いただいて食べたことが一番の思い出として残っている。

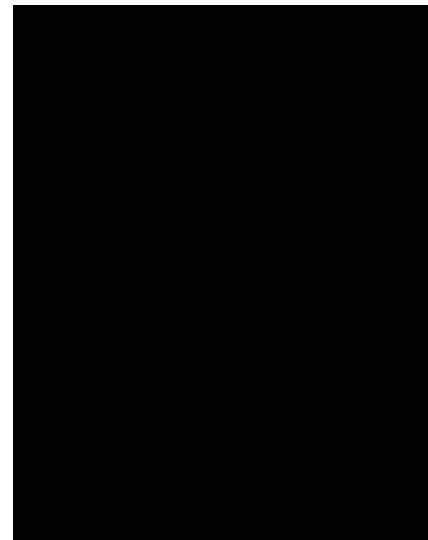


写真14 小学校にて
「地震のお話」



写真15 西表群発地震の
臨時地震観測

松村先生とは西表群発地震発生後の臨時地震観測で一緒に仕事をした時の事が思い出に残っている。京大と東大（技術職員 2 名）と約 1 週間行った（写真 15）。日中は観測機器の設置、データ回収などを行い、夜は毎日宴会であった。料理を作ってくくださるヨシコさん（写真 15 写真中、中央）に大変お世話になりました。またその時一緒に仕事をした東大の技術職員 2 名の方とは今も交流をしている。

7-2. 西南日本地震観測

片尾浩先生との思い出は、衛星装置による西南日本臨時地震観測機器設置を岡山から四国にかけて行ったことである。その時、讃岐うどんをはしごで食べたことやフェリーの待ち時間に一緒に釣りをしたことである。その時は餌を針に付けられなかったけど、今は息子さんと一緒に釣りをされるようで、自慢げにその話をされるのを聞くととても嬉しかった。

7-3. 大大特

伊藤潔先生からは、大大特プロジェクト研究（写真 16）で臨時地震観測点を展開するに当たって、機器設置からデータ保守およびマージ作業を委託できないかとの技術室に対し相談を受けた。当時、元技術室長であった平野憲雄さんと相談し、思い切ってやってみようと言うことになり、著者は地主交渉、機器設置、データ保守およびマネジメントなどを任された。

プロジェクトが終了し振り返って考えると、防災研究所内のプロジェクトを受注し技術、研究支援を行っていくと言うきっかけを与えて下さったが、やった際には大きな成果となって評価された。しかしながら毎年プロジェクトの受注がある訳ではなく、技術室全体で取り組めないのが今後の課題である。



写真 16 約 1m の積雪で埋まった観測装置（大大特）

7-4. 紀伊半島での地震観測

渋谷拓郎先生（6 代目鳥取観測所助手、4 代目観測所長）とは、大大特に引き続き紀伊半島において 32 点の臨時地震観測点を展開し、紀伊半島における地下構造をさらに詳しく調査研究することになり、地震予知研究センターに配属されている技術職員が中心となって技術支援することになった。大大特の経験を生かし観測点探し、業者発注・指導、機器設置、データ回収、マネジメントなどのすべてを技術職員にまかせてもらい、観測点移設はほぼ同時に行った（写真 17）。取得されたデータは、質・量とも研究を遂行するに十分であり、われわれ技術職員による技術・研究支援は果たされていると自負している。



写真 17 観測装置（紀州）

7-5. 満点計画

飯尾能久先生との出会いは、長野県西部の臨時地震観測機器の設置と満点計画の地主交渉で支援依頼されたことである。後者に関してはこれまでの地主との交渉の経験を買われ、白

羽の矢が立ったのではないだろうか。後輩や同僚と 45 点を約 1 ヶ月の期間に見つけ、観測点情報である「点の記」を作成し地震予知研究センターのウェブに掲載した。

宇治に配置換えしてからがむしゃらに仕事を請け負ってきたが、申し訳ない気持ちもあったが、若い人達も育ってきたようなので、思い切って身を引くことにした。

7-6. MT 観測

大志万直人先生とは、いろいろな意味で楽しくつき合わせていただき、感謝している。観測装置設置での穴掘りから、最近では船に乗っての観測（写真 18）など多くの支援依頼をいただき参加させていただいた。なかでも思い出は公務が終わった夜の時間が最高であった。先生と競い合っ歌うカラオケは正直言って仕事から離れ、心が休まり、とても楽しいひと時であったことを今でも忘れることができない。



写真 18 大志万先生と筆者

7-7. 海外技術支援

・フィリピン

渋谷先生から 1992 年海外技術支援の話をいただき観測機器の準備をしていた。しかしながら数ヶ月前に肝炎にかかり、最初の海外出張ではあったが行けなかった。その後度々お話をいただき、2 回目のフィリピン渡航では現地語のタガログ語を少し覚え、現地の人と片言であるが会話することができた。写真 19 は、現地観測所をまかされているスタッフのご家族たちとの記念写真である。行く度に、新しく覚えたタガログ語をその家族たちやスタッフの方々に披露すると驚かれる。それに味を占めて訪れる前にさらに言葉を覚え、今では簡単な会話くらいであれば出来るようになった。もう少し会話が出来たら、と思っていた時に京大後援会から援助を受けて短期の語学留学が応募出来ることになり、渋谷先生に推薦状を書いていただき応募した。認められ 1999 年 8 月に 19 日間語学留学をした。しかしながら、語学を覚えるぞ、と意気込んでみたが、結局そんなに簡単には覚えることは出来なかったことを記憶している。



写真 19 フィリピン技術支援

ここ数年お誘いがなかったが、定年前の今年技術支援依頼があり、12 月 13 日から 17 日までの 5 日間フィリピンを訪れることになった。そのことについては第 10 号技術室報告に別途投稿する予定である。

・台湾

ジム・モリ先生との出会いは台湾での水温観測である。台湾では 1999 年集集地震が発生し、地表面に Chelungpu 断層が生じた。1110m 付近の断層をつらぬくボーリング掘削がされており、その中に精密温度計を入れて断層摩擦発熱温度を測定した（写真 20）。著者は測定現場を下見し器



写真 20 台湾、観測坑井における精密水温観測

材調達、準備段階から観測終了するまで一貫して関わることができた。最初から最後まで技術・研究支援できたことは、今回の研究に対し大きく貢献できたのではないかと考えている。

余談ではあるが、二人には餃子を作るという趣味での共通点があり、一度どちらがうまい餃子か、会を開いて食べ比べをしたが、今のところ引き分けに終わっている。今度こそはと、ひそかに練習をして再試合を楽しみにしているが、さていつ望み叶うのだろうか。

8．技術室企画情報班としての新企画他

・例会のお世話

それまでの例会は、室長が議事報告するだけの一方通行であった。当時室長の平野さんに相談し、司会、書記を順番とし、報告および議題に分けて行っていただくよう提案し了解をいただいた。その後は、全員が責任を持ちながら例会に直接参加する形で行うことができた気がする。そして、さらに当番製で業務内容を発表する情報提供型の時間も組み入れて会の活性化を取り入れバージョンアップを行った。しかしながら、耐震改修工事によって中止され、現在再開されていない状況である。

・バーチャル活動のまとめ役

技術室として地震防災に、何か貢献したいと考えていたとき、防災研究所中期目標・中期計画の中で、技術室がバーチャル活動に取り組むことになった。そこで、まとめ役となり議論した結果、地元中学校に出向き出前授業（写真 21）を行うことになった。若い人達が中心舞台となって宇治東（2005 年）、宇治西（2006 年）、木幡中学校（2007 年）と行ってきた。また、宇治地区のオープンキャンパスや宇治ラボラトリーでもバーチャル展示したりした。技術室主体でのバーチャル活動の母体ができただろうか。この経験を活かし、防災研究所の中の技術室としてどのように活動して行くのが良いのか、若い人達で「技術室の今後の在り方について」真剣に考えて欲しいと願っている。

・通信のまとめ役

宇治に配置換えとなり、通信 107 号から手がけ現在 123 号発行（退職月に 124 号発行予定）までのお世話をした。企画情報班の松浦氏には発行に関して絶大なるご協力をいただき感謝している。お世話した通信は計 17 号、112 編で、1 号当たりの平均投稿数は 6.6 編でした。このことは、技術職員が研修、学会などに積極的に参加された結果ではなかろうか。

・教員講義のお世話（写真 22）

日本地震学会第 3 会場で桜島観測所井口准教授に会い、考えている思いを相談してみた。先生も技術職員に協力や開発をしてもらいたいとのことで、若い人達に対する教員講義を始めた。井口准教授には最初の教員講義をお願いした。約 2 年間で 6 回ほど開催した。その後、若い人達に今後どうするかも含めて聞くと、どうしてか余り乗り気がないような意見が多かった。無理やりするのもなんなので、室長と相談ししばらく休憩することにした。

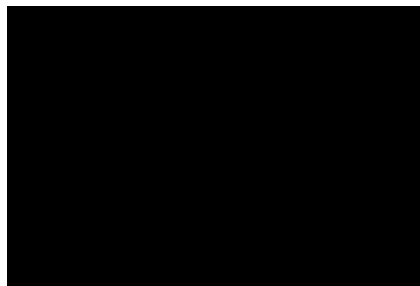


写真 21 バーチャル、出前授業



写真 22 教員講義風景

・第2 専門技術群世話人及び群長の仕事

一昨年、第2 専門技術群世話人メンバーに任命され防災研技術室合同の第2 専門技術群研修プログラムを企画した。そして、昨年は京大総合技術研究会プレ実行委員会が設立され、回路分野の責任者として参画し、さらに本番である来年3月9日、10日に向けて今年も取り組んでいる。また、今年は第2 専門技術群の群長として世話人の方々に協力していただき第2 専門技術群研修会を1日の日程で開催した（写真23）。



写真23 第2 専門技術群研修(桂にて)

9. 業務だけではなく楽しんだスポーツ他

鳥取勤務時代は地域貢献、業務をこなし、休息したい気持ちになったときに中規模地震が発生し、日夜多忙の日々を過ごしたことを記憶している。今思えば、公私共に楽しく青春時代を過ごさせていただきました。7年前宇治に配置換えになった直後に次男を亡くし、いろいろと悩む期間が少しあったが、今思えばとにかく自分自身と葛藤しながらも悲しみを打ち消すようにがむしゃらに働いた、この7年間だった気がする。

毎月の予定表を関係する教員にメール配信し、隙間を埋めていただくように業務を受注し一心不乱に働いてきた。振り休日が取れないので、次の出張日に入れて、消滅させることまで行っていた時期もあった。しかしながら、以前から行っていた学生さんとの楽しい交流や、関係する先生との懇談会（写真24）などを、宇治に来てからも復活させ、家内に料理を作ってもらい楽しい会を月1回、いや2回？3回行って、ストレスの解消を行ったことで、宇治勤務の7年間がなんとか乗り切れたのではないかと考えている。

そこで、自分なりにストレスの解消や関係する人との交流会を定期的に行っていたので紹介する。

・ボーリング大会（中尾・川方杯）

写真25に示すように、主に学生さんとの交流で、年3回程度の割で開催した。大会後の二次会は必ず宿舎で家内が作るカレーライスで懇親会を開催するが、狭い宿舎は毎回13、4名の出席で、嬉しくもあったが床が抜けるのではないかと心配であった。

そんな中、防災研究所主催のボーリング大会にも参加した。結果は平成17年個人優勝、平成18年個人準優勝、平成19年、第4位であった。年々順位は下がっていったが、まだまだ



写真24 鳥取での交流会



写真25 ボーリング大会
（中尾、川方杯）



写真26 テニス大会（川崎杯）

若い人達と勝負してもいけるジャン！と思い、少し優越感を味わったことは事実である。

・テニス（川崎杯）

地震予知研究センター教授である、川崎一朗先生にお願いして、年 2 回程度行っている（写真 26）。学生さんと教職員ご夫婦での参加で、大会後に懇親会を催し好評を得ている。私たち夫婦は、上手になれなかったのが裏方に徹しましたが、参加されました方々の笑顔を見ることがとても楽しかったです。

・卓球

出張しない日はできるだけ昼休みに行ってきた。時々教えて欲しいということで勤務時間以降に教えたこともあった。土曜日は家内も含め地震防災の教授の奥様や農学部の教授の方と 2 時間程度汗を流して楽しませていただいた。自分自身の肥満気味な体型（メタボ）も考え、汗をかき、楽しみながらやってこれたことに感謝している。



写真 27 鳥取、小学生卓球教室

今後老化がきびしくなるが、自分に合うこれからのスポーツとしてやっていくとしたら、卓球とボーリングではないだろうかと考えている。特に卓球は、鳥取で待っていてくれる小学生の子供たちもいるので頑張っ続けて行きたいと考えている（写真 27）。

10. 地域におけるボランティア活動

直接仕事は関係ないが、3 男の息子が小学校の頃、週休 2 日制が小学校に導入された。土日の休日に地域ボランティアとしてスポーツなどを通して子供たちの健全育成を図って欲しいとの要望で、卓球教室を始めたのが 20 年前だったとき記憶している。

当初は少ない人数のため楽しんでやってこられたが、年々希望者が増え保護者の方にも協力お願いしたが、なかなか忙しいようで協力願うことができなかった。しばらくして、小学校が分離し、新しい中ノ郷小学校が建設され、そちらの方を主体にして卓球教室を開いた。この頃になると、保護者の方々も協力していただける方が多くなり、地域におけるスポーツ育成が広がったことを感じながら指導させていただいた。

宇治に転勤するまでの思い出としては、教え子である地元小学 2 年生男子が全国大会に行ったことである。また、当時は中学校の卓球部もコーチを依頼され指導していた。次男が卓球をやっていた関係もあり、弱体であった卓球部を県体に出場するまでに力を注いだことがあった。しかしながら、強いチームは沢山あり 3 位にはなれなかったことなどを覚えている。



写真 28 鳥取県教育委員会表彰状

この他に PTA 活動、子供会育成、地域青少年育成、鳥取市社会教育の役員などを受けて行った。これらの地道な活動が評価されてか、1998 年 10 月に鳥取県教育委員会から一般個人功労者として記念品と表彰状をいただいた（写真 28）。地域での活動で多く感謝状や表彰状をいただいた中もっとも価値あるもので、人生の中で得た数少ない喜びのひとつではないだ

ろうか。

こども達に卓球を教えながら、実は逆に教えられることが多々あったのは事実であり、素人であった私が育成者として成長していく上では、こども達に本当に感謝をしている。

11. これからの技術職員への提言

最近言われていることだけど、われわれの時代をアナログ人間で若者の時代をデジタル人間と、よく耳にするが、人間は実に難しい生き物であるということではないだろうか。これからはデジタル人間が多くなる時代だが、老婆心ながら若い人達に何かの参考になればと思い、著者が好きな言葉を記して勝手な置き土産とさせていただきます。

- ・最大のライバルは自分自身
- ・ゆっくりと歩くと見えてくるたくさんの景色
- ・幸せには鈍感で不幸には敏感
- ・辛いという漢字はもう少し頑張れば幸せになれる漢字だ
- ・神様・仏様・ご先祖様、影からじっと見守ってくださる「様」、それを「おかげ様」という
- ・初心忘るべからず

12. 宿舎での交流会

鳥取勤務時代は鳥大生さんと、宇治では京大生さんを宿舎に招待して交流会を行ってきた（写真 29）。年に 10 数回行う、学生さん、留学生、職場のご夫婦たちとの交流会は実に楽しい。特に学生さんとの交流は、自分自身は年をとっていくけど、毎年宿舎を訪れる学生さんは若いということで、老いをブレーキさせてくれる潤滑油の役目を果たしていただいているのが本音である。

また、家内と女性だけでケーキ作りの会もできたりして、夫婦共に感謝しながら若い人達との交流を楽しく深めさせていただいた（写真 30）。



写真 29 宿舎での交流会



写真 30 宿舎での女性交流会

13. さいごに

宇治に転勤して 7 年目になる。率直な感想としては、最初の 5 年間くらいが技術室・地震予知・地震防災の業務で忙しく、結構充実した日々が暮らせた気がする。その後は、自分が考えている後輩育成の考えが噛み合わず、押し付けがましくなったのか、いつも空回りしたりしていた 2 年間であったような気がする。

京都大学に勤め、最初の 3 年間で宇治勤務、そして 31 年間鳥取勤務し、最後の 7 年間で宇治で勤務した。この 41 年間で振り返ってみたが、思い起こせば青年・中年・老年時代をなんとか無事過ごさせていただき定年を迎えることができた。ひとえに辛抱強く見守っていただいた方々のお蔭だと思っている。本当にありがとうございました。

最後に、川崎一朗地震予知研究センター長、渋谷鳥取観測所長、その他お世話になりました多くの方々に深く感謝し、心より厚くお礼申し上げます。